

博 士 論 文
韋 応 物 詩 研 究
(要 約)

山田 和大

本論文は、「第一部 韋応物の伝記」，「第二部 韋応物の吏隠意識について」，「第三部 韋応物の自然詩について」の三部構成で，韋応物という詩人，およびその詩の実態を解明しようと試みたものである。

第一部では，韋応物の伝記について考察した。韋応物は正史に伝がなく，その事跡は従来，わずかな伝記資料，および彼自身の詩をもとに推測するしかなかった。こうした状況の中，二〇〇七年に韋応物一家の墓誌が出土した。これは，韋応物の友人で同時代人である丘丹の手になるものであり，韋応物の詳細な事跡が書かれている。

第一章ではこの墓誌に基づき，従来の韋応物の伝記研究の補正を試みた。墓誌から新たに判明したこととして，韋応物の字が「義博」であったこと，韋応物が右千牛として官吏としての生活をスタートしたこと，韋応物の息子は従来二人いたと考えられていたが慶復一人であったこと，貞元七年以前には亡くなっていたこと，妻は元氏と言い，韋応物は元稹と姻戚関係にあたること，などが挙げられる。中でも特に重要な点として考えているのは，韋応物の晩年の状況である。従来，韋応物の最終官職は蘇州刺史で，それを退任したのち，蘇州の永定寺に閑居していたときに韋応物は亡くなったと考えられていた。しかし，墓誌には蘇州刺史在任中に亡くなったということが記されており，従来の研究との矛盾が見られた。

この矛盾を解きほぐすために，第二章では，晩年の事跡について考察した。まず，従来の説とその根拠を整理し，実態解明のキーポイントとして韋応物が閑居した永定寺の場所を明らかにする必要があることを指摘した。その上で，韋応物が蘇州の永定寺に閑居したという推測の根拠となる，韋応物詩の題下注や地方誌などの記述を検討し，他の可能性がないかを探った。すると，『錦繡万花谷』の記述などから，韋応物が刺史として赴任した滁州に近い，揚州六合県にも永定寺があったことが明らかになった。六合県に永定寺があったことを踏まえ，『唐人選唐詩』や地方誌などの記述を整理したところ，墓誌の記述，すなわち韋応物が蘇州刺史在任中にこの世を去ったとする方が妥当性が高いという結論を得た。この結論は，第二部の吏隠意識の理解の基礎となっている。

第一部附論では，韋応物自身が書いた韋応物妻元蘋墓誌と悼亡詩について検討した。まず，韋応物の悼亡詩の特徴として，妻の忘れ形見である子どもを詠むことを指摘した。そして，その表現は『文選』の哀傷表現に源流があることを明らかにした。また，韋応物が生み出した悼亡詩の表現は，韋応物と姻戚関係にある元稹の悼亡詩に，より具体的な様相を表す表現に変わって受け継がれていることを指摘した。

第二部では，韋応物の吏隠意識について扱った。吏隠意識とは，官吏として働く上での使命と，政治から離れ閑居したときに味わうことのできる，ゆったりとした心境との調和をはかろうとする意識のことである。

第三章では，韋応物詩における「幽」字の使用状況から吏隠意識の変遷を概観した。「幽」は，閑居の位相を表す語として用いられるが，それが官吏の世界を表す語とどのように対置されているかという点に着目した。その結果，「幽」と官吏の世界を表す語との対置表現に吏隠意識の様相が表れており，それが韋応物の人生のステージごとに異なることが判明した。さらに韋応物は年齢が上がっていくにつれて，吏隠意識を成熟させ，吏と隠との調和を図ることができるようになっていったことを明らかにした。

第四章以降では，韋応物の吏隠意識をその人生の後半期にあたる外任以降を中心に論じ

た。第四章では、韋応物の吏隠意識の転換点として左司郎中期が挙げられることを指摘した。韋応物は、外任の当初、すなわち滁州刺史期には積極的に官吏としての仕事することを好まない心境にあった。これは、この時期に寺院詩が多く見られることに象徴的で、政治の場から離れた清浄な空間に行くことで心を解放させる様子が見られた。このような様子は、滁州刺史退任後の永定寺閑居期、その後の江州刺史期にも見られるものだった。こうした状況に転機が訪れるのは、左司郎中となったときである。韋応物が左司郎中となった契機は、韋応物墓誌によれば皇帝によって江州刺史としての働きを認められたからである。このことは、若年期に持っていた「玄宗の側近である自分」というアイデンティティの基盤を、安史の乱によって失うこととなった韋応物に、アイデンティティの再構築を促した。この時期を境に、韋応物は寺院詩をあまり作らなくなり、官吏として役所にいながらにして閑居の境地を味わうことができるようになっていったのである。

第五章では、最晩年にあたる蘇州刺史期について考察した。まず、第二章で得た、「韋応物は揚州六合県の永定寺に閑居した」という結論に基づき、永定寺に関する詩群、その他、従来蘇州刺史期の作とされていた詩群の繫年を検討し、滁州刺史期の作とすべきものがあることを確認した。その結果、寺院詩は一首を除いて全て滁州刺史期に移動すべきだとなったことが重要である。韋応物が寺院や僧といった政治の世界を離れている場所や人物と関わらなくても、調和のとれた吏隠意識を持ち得たということになるからである。従来考えられていたように、韋応物が蘇州刺史退任後も永定寺に閑居したということであれば、韋応物は蘇州刺史期に吏隠の境地を詩に表しながらも、結局は寺院へと向かう、どこまでも隠遁思考の強い人物であったということになる。しかし、第五章で考察したように韋応物が最晩年に寺院への退居を必要としていなかったというのであれば、韋応物は吏と隠、二つの側面の調和をうまくとっていたということになる。すると、韋応物は、まさしく白居易にとって理想的な生き方をした人物として捉えられていたことになる。この結論は、白居易の閑適詩の源泉としての韋応物詩の位置づけをより明確にしたものであり、文学史的にも重要なものだと考えている。

第六章では、吏隠意識の変遷を理解する上で注目した、「心の支え」について検討するために、韋応物の故郷観について考察した。晩年の韋応物は、皇帝の恩を心の支えとしていたという結論を出した。また、一般的に故郷を離れたものにとって故郷を思うことは「心の支え」となり得ると考えられる。そこで、「心の支え」という共通点を持つ故郷観と吏隠意識の変遷に関連があるかどうかを見ていくこととした。それを明らかにするために、故郷観が韋応物詩の中でどのように描かれているかを確認したところ、兄弟などの肉親がいる場所という意識が強く表れていることが明らかになった。こうした傾向は、滁州刺史期に現れはじめ、左司郎中期を境に変化が見られることを指摘した。このことは、吏隠意識の変遷と軌を一にするものであった。さらに、最晩年の蘇州刺史期には、故郷と蘇州、それぞれに心が惹かれている様が詩に詠まれていることを明らかにした。これは、白居易の故郷観の先蹤として捉えることができるということを示唆している。

第三部では、韋応物の自然詩について考察した。第七章では、「賞」字の使われ方を考察し、韋応物の自然詩の特徴を考えた。六朝以来、自然観賞の意で使われてきた「賞」字が使われる場面として、韋応物詩においては韋応物とともに自然を愛でる人がいる状況が多く見られた。これは、謝靈運、王維、孟浩然の詩と比較しても特徴的なことであった。

このことは、韋応物が自然を觀賞する際に友を強く求めていたことの表れであろうということ述べた。

第八章では、第七章での考察を承けて、植物に人間と同じ性質を求めている表現があることに着目した。「花意」という表現は、韋応物以前には見られないもので、これに象徴的なように韋応物は植物の「こころ」を認めていた。こういう表現は、滁州刺史期に見られるようになる。この表現の背景として、故郷を離れ、知己を失った韋応物が、眼前の植物に友人となることを求めていただろうことが想像されるということを指摘した。

第九章では、吏隠意識と自然詩を総合して考えるために、官吏として生活する官舎と自然物が置かれている庭との境界と言える「窓」の表現を考察した。韋応物の「窓」の表現の特徴として、①吏隠の思想が詠われる、②悼亡詩に使われる、③自己内省の場を設定するという三点が挙げられた。特に③は白居易の思想と共通するものともなっており、中唐文学の展開という点で重要なポイントになることを指摘した。こうした表現の背景には、韋応物が滁州刺史期に感じた孤独感があるのではないかということも述べた。